

高倉小学校発掘調査説明会資料

1993年10月 2日

(財)京都市埋蔵文化財研究所

- <所在地> 京都市中京区高倉通六角下る和久屋町343
<調査期間> 1993年4月5日～10月末日(予定)
<調査面積> 約900㎡

はじめに

現在、京都市では、市街地での小学校の統廃合が進められています。その一環として、旧日彰小学校の校地に新しく高倉小学校が建設される運びとなったため、工事によって壊される遺跡を発掘調査することとなりました。

調査地は、平安時代は平安京の左京四条四坊二町にあたります。平安京の中でも東のほうによったところになります。鎌倉時代から室町時代・戦国時代にかけても、調査地の周辺は市街地であったと推定されています。そして江戸時代には、織田信則(信長の甥)、のちに伊予国松山藩(今の愛媛県)の松平家の屋敷として幕末まで利用されたことがわかっています。旧日彰小学校は明治2年(1869)に創立されました。

以下に、調査の順序に従って、新しいものから成果の一部を報告します。

江戸時代中期～後期

調査区の南部に東西方向に細長い大きな土壇が2基(土壇2・3)、中央部西側には南北方向の大きな土壇が1基(土壇1)あります。これらはそれぞれ京都を襲った二つの大火の後片づけをした穴です。前者は元治の大火(蛤御門の変1864年)、後者は天明の大火(1788年)に対応します。いずれも多量の瓦や陶磁器類が出土しました。特に土壇1の出土遺物はまとまっており、加えて日本刀や石灯籠の破片もあり、この地に営まれた武家屋敷の生活の一端をうかがうことができます。

調査区の西端近くに、建物や等間隔で並ぶ柱穴を見つけていますが、いずれも掘立柱なので納屋のような建物であったと推定しています。それ以外には顕著な建物を検出していません。他にこの時期の遺構は井戸が5基あります。

桃山時代～江戸時代前期

調査区の全域にわたって柱穴を検出しました。個々の建物の復原はまだできていません。柱穴には、礎石の上に柱を立てるもの、掘立柱で東西・南北方向に並ぶもの、北が若干東に振れるものの3つのグループを確認しています。これらは複雑に切りあっており、頻繁に建物の建替えが行なわれたことがわかります。

柱穴にともなって、調査区の中央部東側で、L字形に路地の跡を見つけています。東西方向の部分には両側に溝を作り、南北方向の部分には粘土を薄く張りつけて路面を作り、西側に浅い溝と杭列を設けています。柱穴の中にはこれに沿って並ぶものもありました。

室町時代後半～戦国時代

この時期も調査区の全域に柱穴が分布します。すべてが掘立柱で桃山時代～江戸時代のものに比べるとやや規模は小さい傾向にあります。町家が密集して建っていたことが推定できます。

なお、この段階で、次に述べる礫敷遺構600の南西隅部分を検出したので、調査区を北東側へ拡張しました。

室町時代前半

この時期は調査区の北部と中央部・南部で様相が異なります。まず、北部は東側を中心に礫敷遺構600が広がります。中央部が土壇状に盛り上がり、周囲には浅く掘り下げた溝が廻ります。そして、全体に粗密はあるものの、拳大程度の大きさを中心とした川原石を詰めています。このような遺構は、京都市域の調査では、まだ発見されたことがなく、現状ではどのような施設であったのか断定できません。考えられるものとしては、建物の地業（じぎょう）・墓地などを想定しています。いずれにしても大きな敷地の屋敷もしくは寺の一角が現れていると考えます。

一方、調査区の中央部・南部では、さらにたくさんの柱穴が見つかりました。この時期も町家の密集地であったことがわかります。これに加えて、井戸（井戸1000）やゴミを捨てた土壇群も検出できました。

遺物の概要

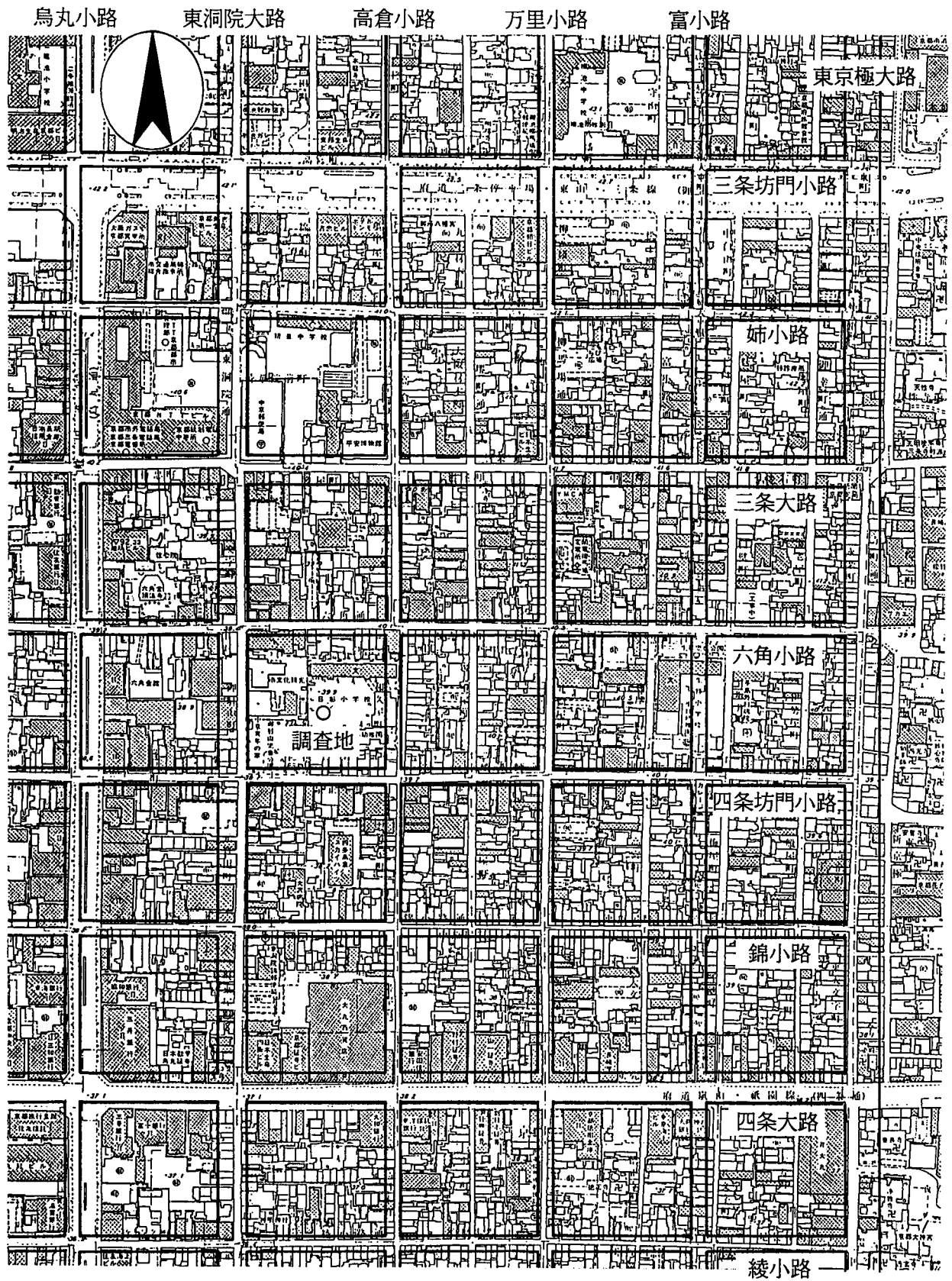
室町時代～江戸時代前期にかけては土師器・瓦器・焼締陶器がほとんどを占めています。中でも土師器の食器が多く、瓦器の鍋、陶器の甕がそれに次ぎます。また、破片ではありますが、中国から輸入した青磁や白磁の碗も混じっています。

江戸時代前期～後期にかけては、伊万里産の磁器、京都産の陶器が食器の多くを占めるようになります。中には尾形乾山の作品と推定できる角皿も含まれています。大名屋敷で大事に使われたのでしょうか。大名屋敷の関連では、ほかに日本刀や石灯籠もあります。また、火事の後片づけをした土壌から屋根瓦が大量に出土しました。

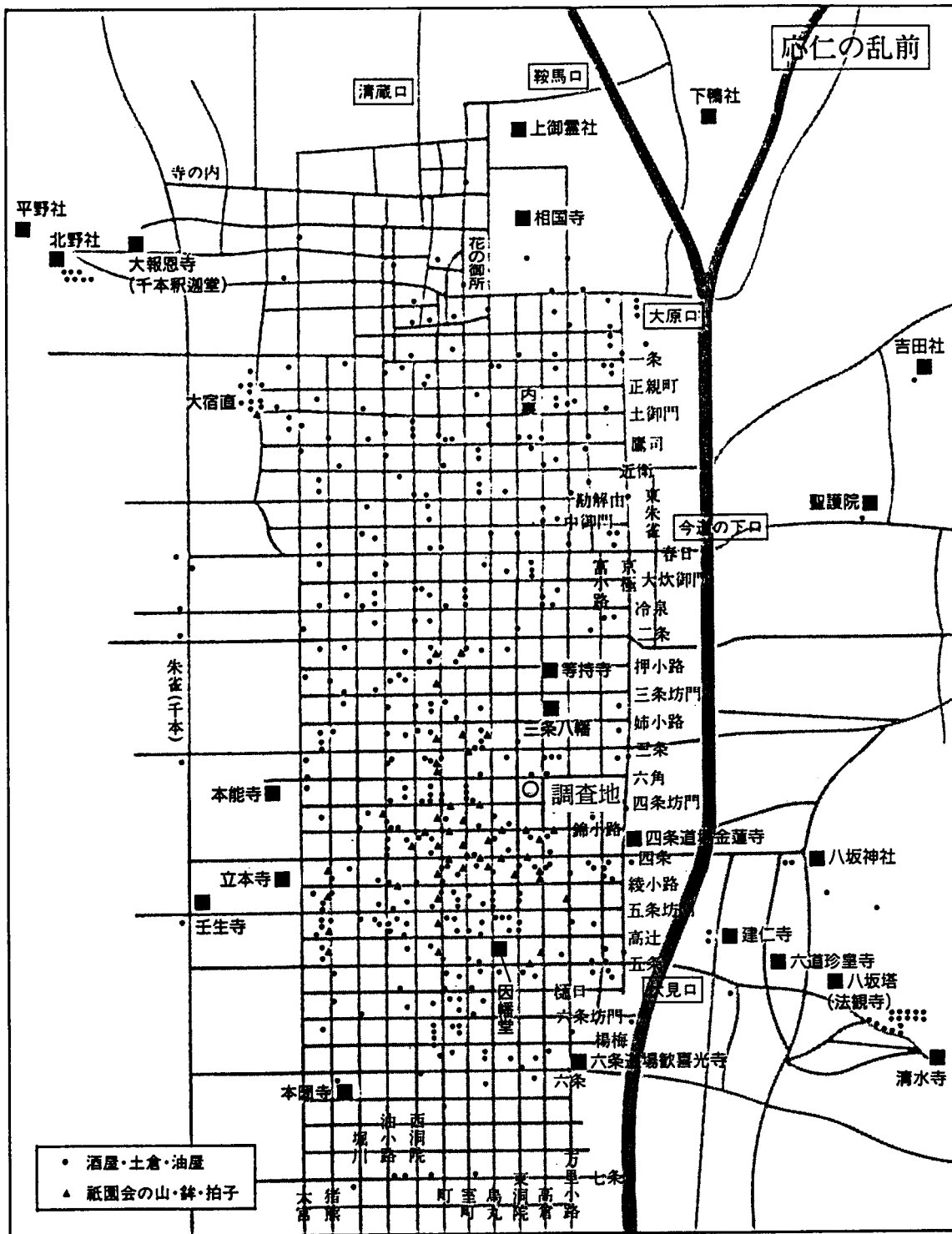
まとめ

最後に、調査自体はまだ途中の段階ですが、いくつかのわかったことをまとめておきます。

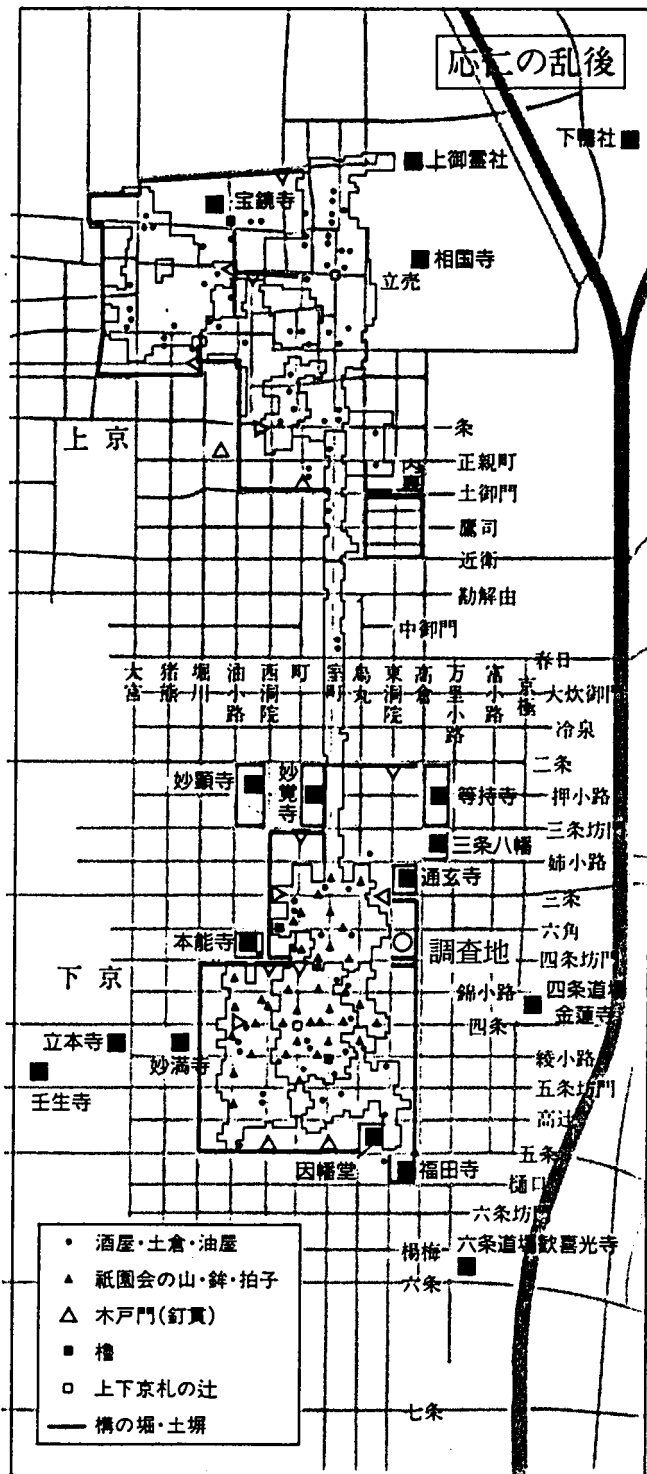
今回の調査の大きな成果は、室町時代から江戸時代に至る下京の町並みの様子の変遷を、遺跡の上から確認することができたことです。町家と一定の広さを持った屋敷が同じ町内にあった事、空き地で残されていた町の中心部に路地が伸び、町家が建つようになった事が確認できました。また、遺構としては明瞭に確認はできませんでしたが、江戸時代の京都の武家屋敷の生活の一端を出土した大量の遺物からうかがう事ができました。



調査地の位置 (1/5000)



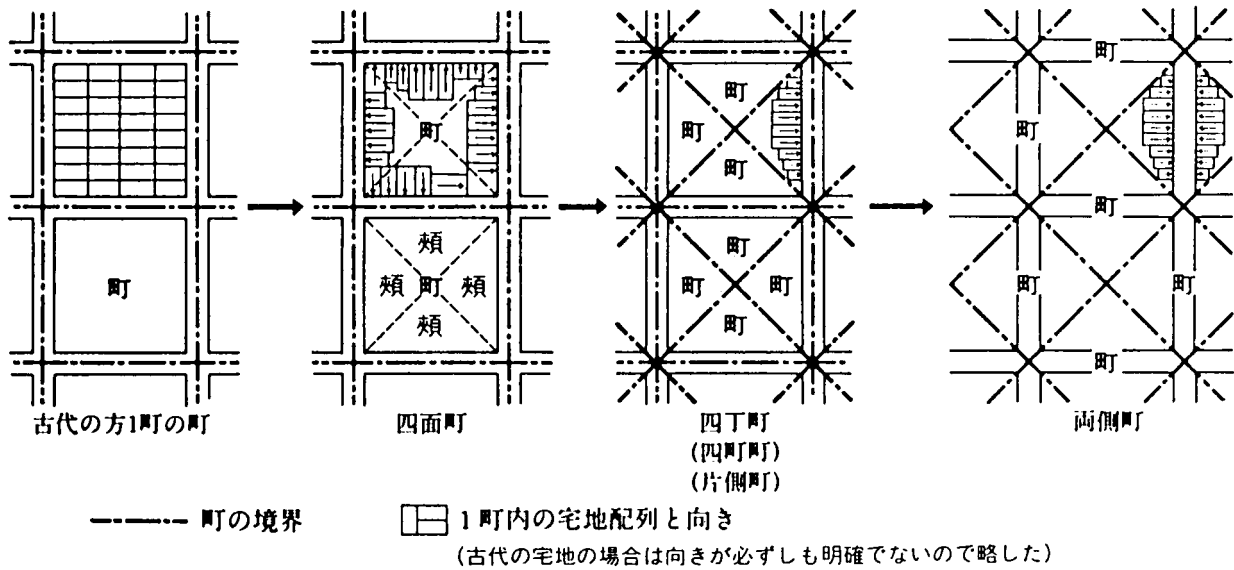
京都市街復原図（応仁の乱前） 高橋康夫『洛中洛外』より



中世になると、京都の町は、平安京の枠組を残しながらも政治的な都市として、また、商工業の中心地として発展していきます。調査地もそうした市街地の中に組み込まれていました。

応仁の乱で京都の町は、一旦、焼けてしまいましたが、乱後も上京と下京の二つのまとまりを形成して、以前にも増して発展していきます。調査地はこの頃の下京の東端にあたります。

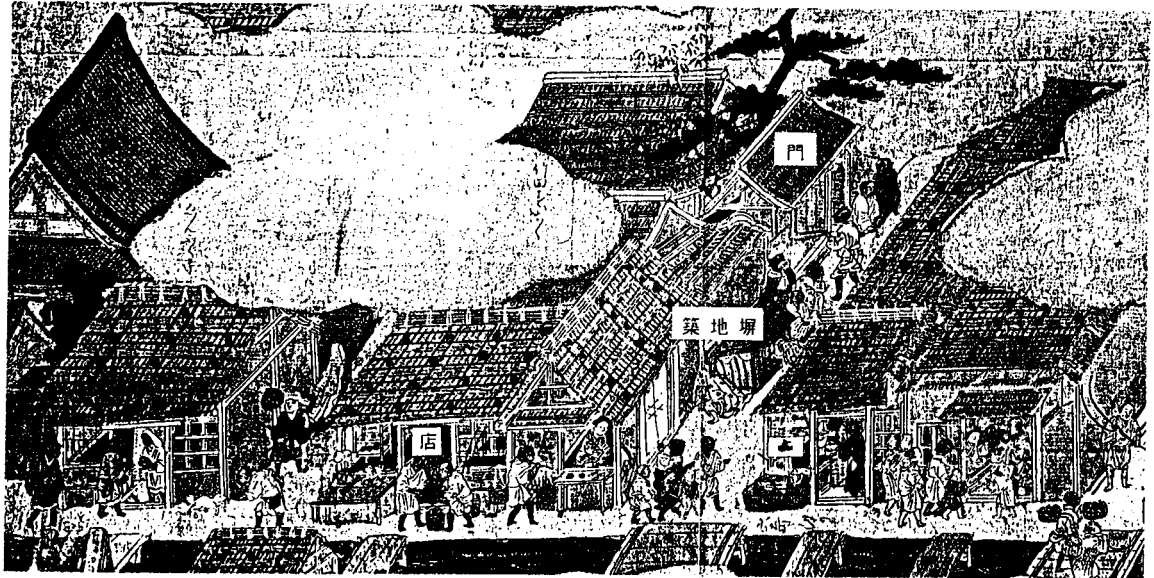
京都市街復原図（応仁の乱後）
高橋康夫『洛中洛外』より



一町内の宅地割の変遷 足利健亮『中近世都市の歴史地理』より



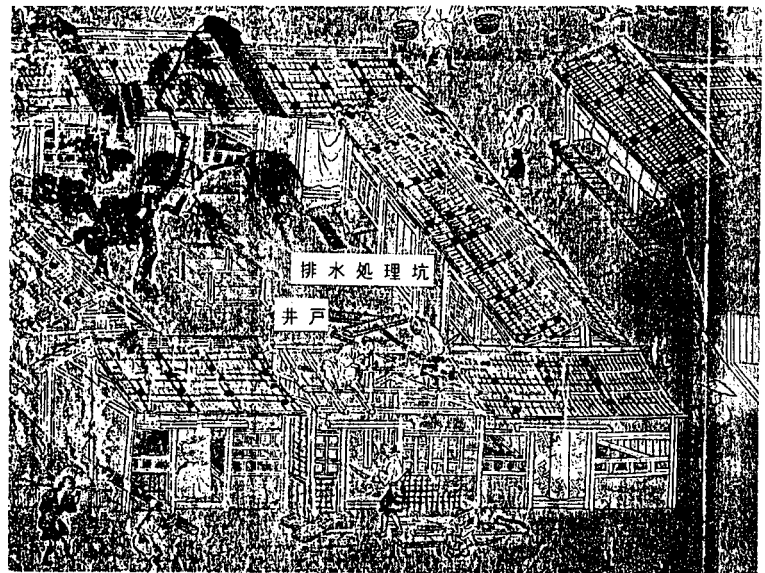
調査地周辺 (洛中洛外図上杉家本より)



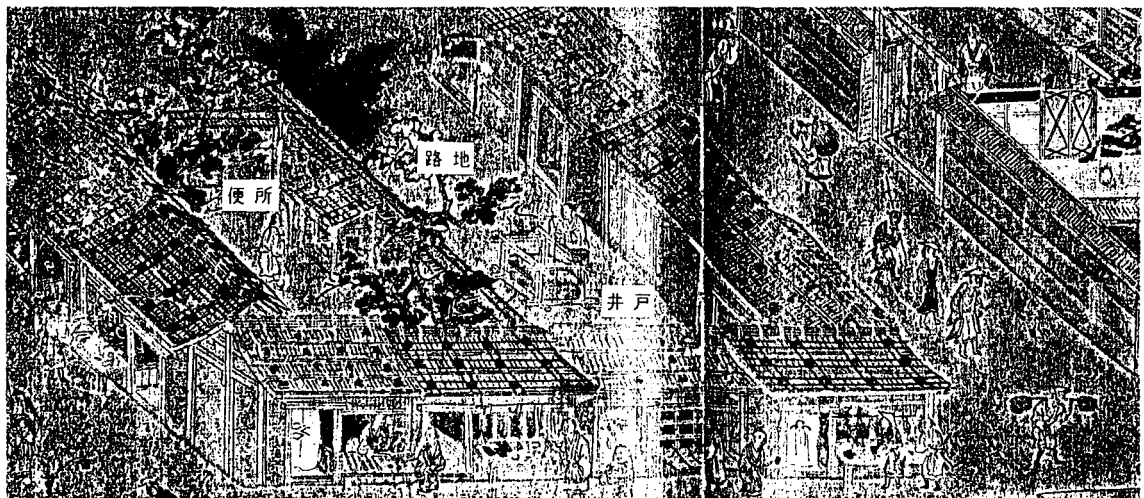
(洛中洛外図上杉家本より ↑)

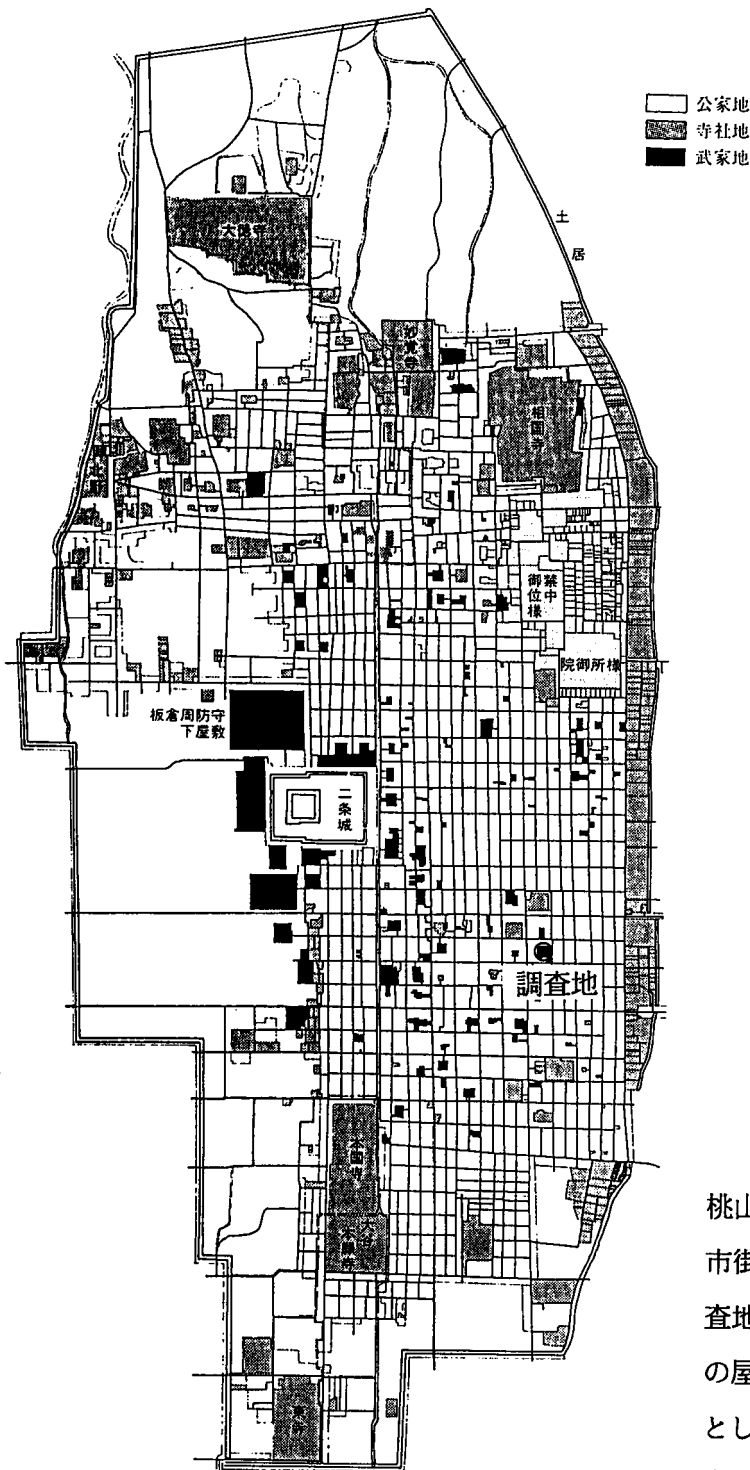
一町の中には、塀を巡らせ門を構える家や、道に入口を開いて商売をする家などがありました。

一町の中央部は空地になっていて井戸・便所などを設け、住民が共同で使いました。後にはここに路地が伸び、家が建ち並ぶようになりました。



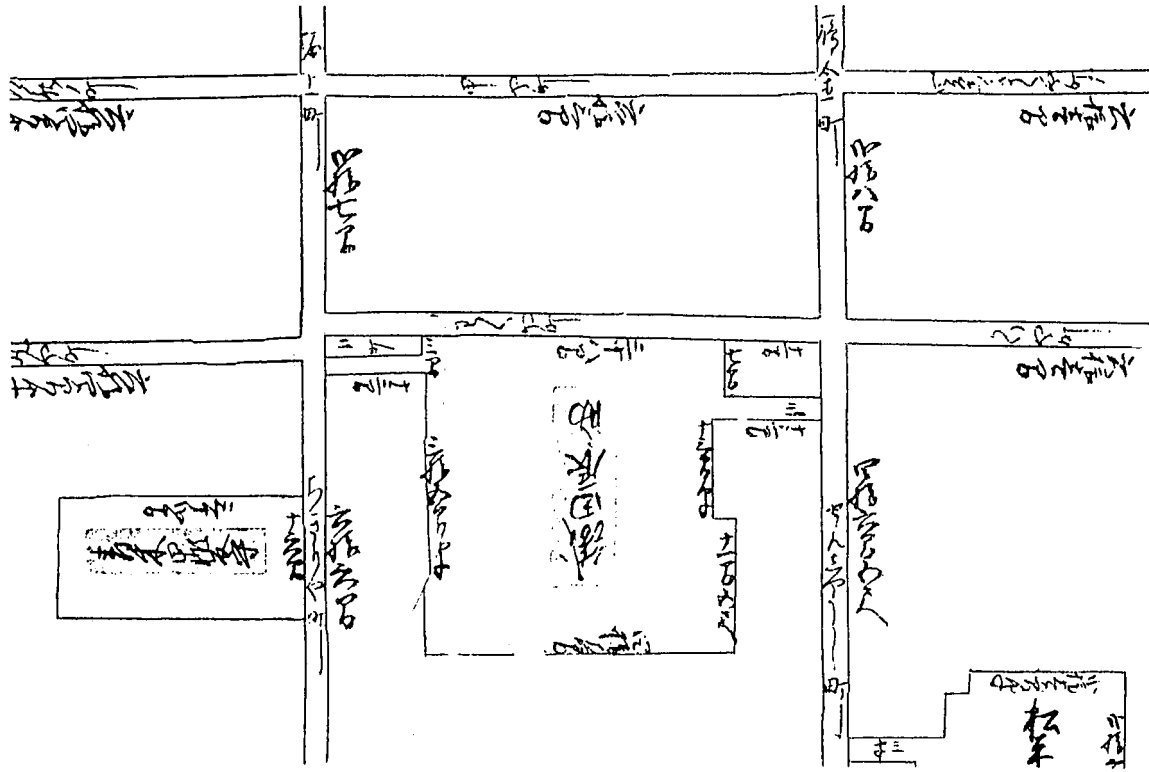
(洛中洛外図町田家旧蔵本より ↑↓)



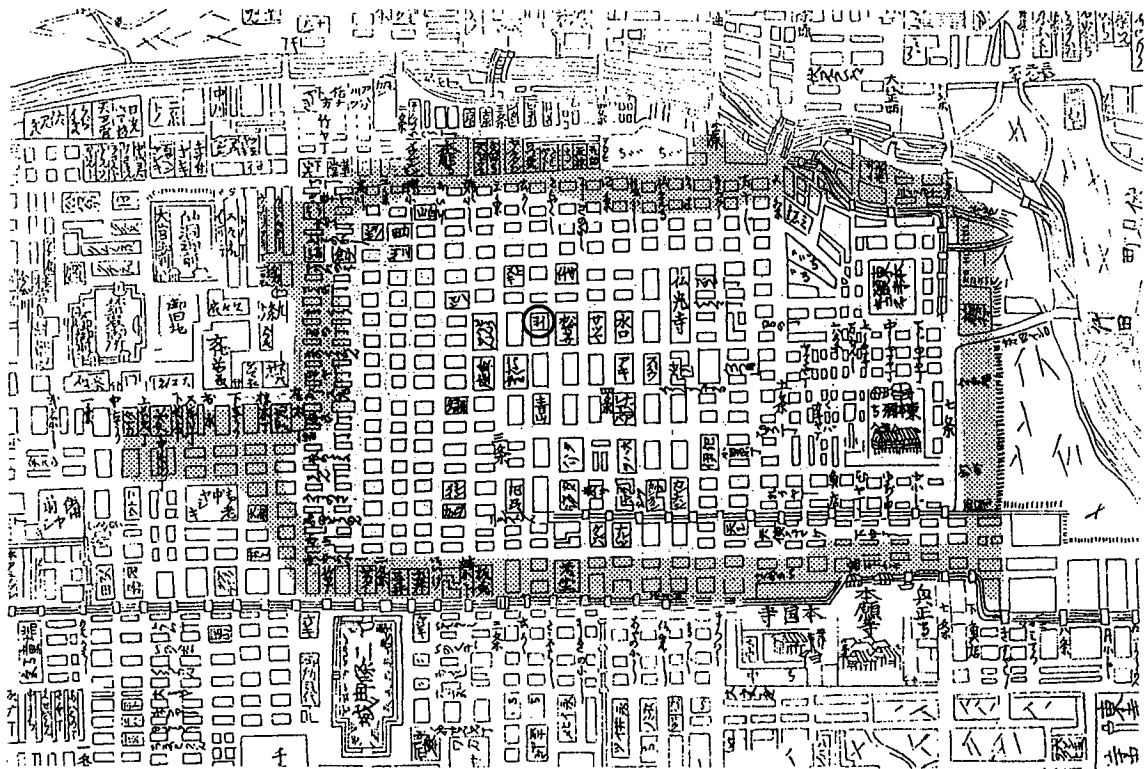


京都市街地図 (江戸時代前期)
『日本都市史入門 I 空間』より

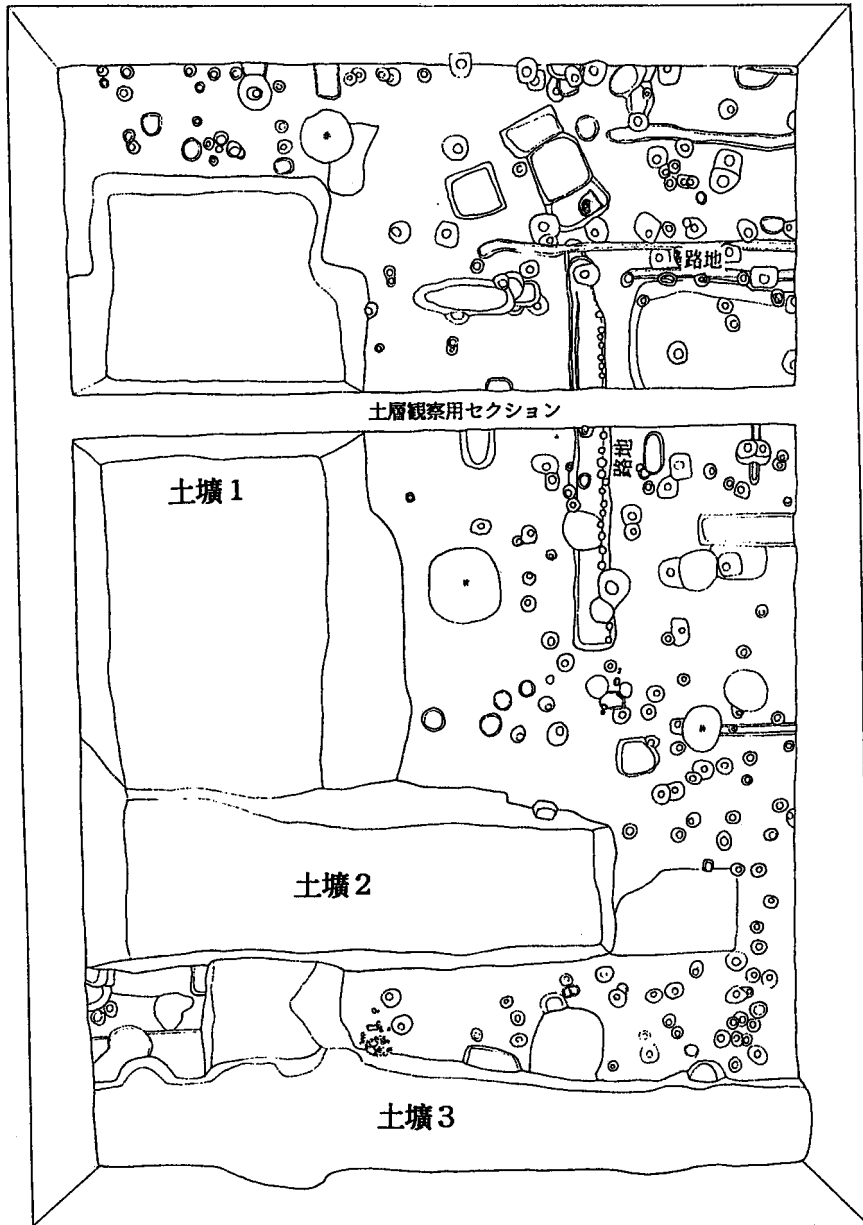
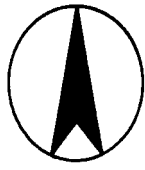
桃山時代から江戸時代にかけて、市街地は急速に拡がりました。調査地は江戸時代はじめは織田信則の屋敷、後に松山の松平氏の屋敷として利用されました。屋敷は何度も火災による被害を受けたようです。そして、1869年(明治2)には小学校が開校しました。



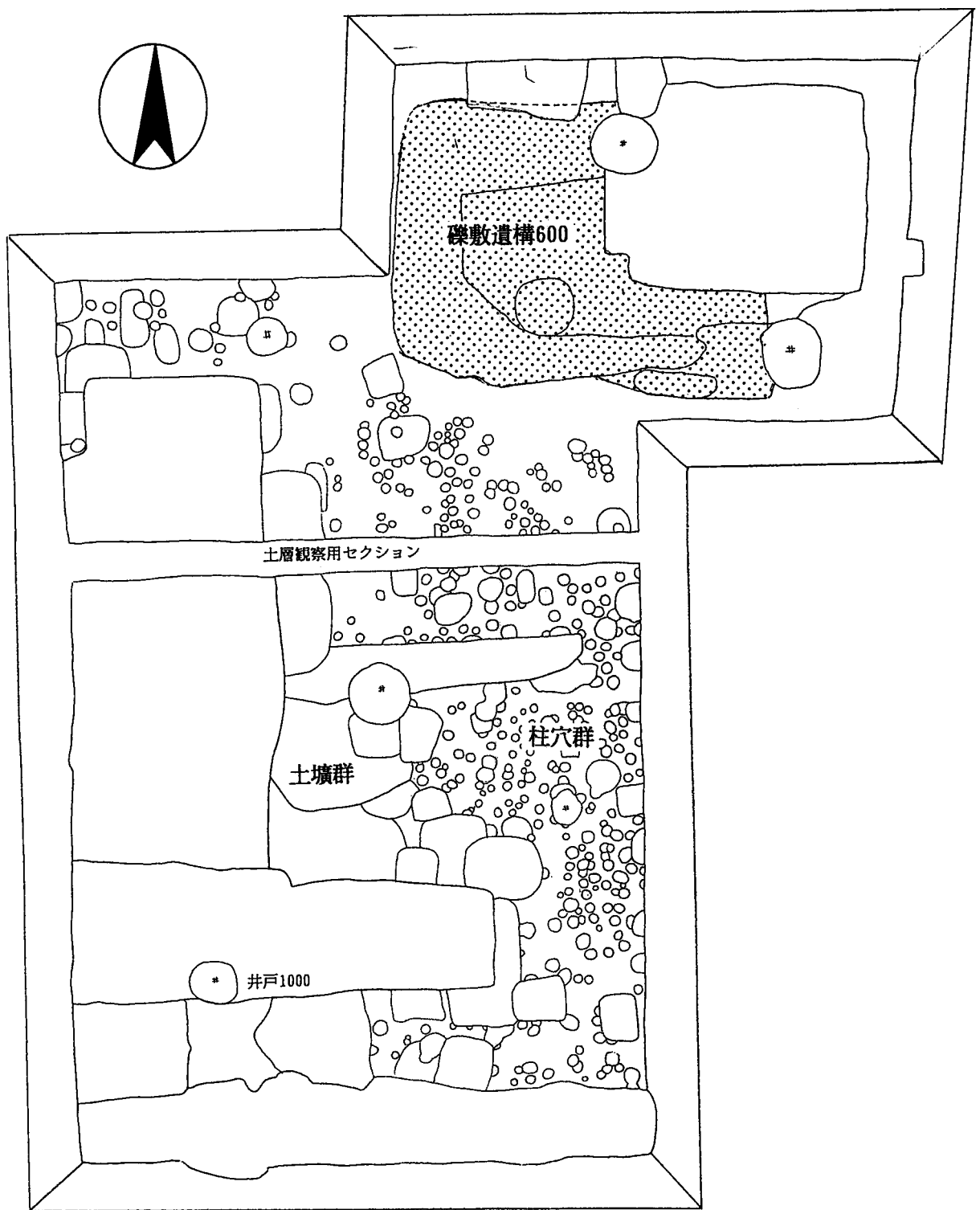
調査地周辺 (洛中絵図より)



元治元年の大火



調査区平面図 (桃山時代~江戸時代前期 1/200)



調査区平面図 (室町時代前半 1/200)